
ショートショートでここにちは での

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショートショートでこんなにちは

【著者名】

Z8855E

【作者名】
での

【あらすじ】

色々な短編の集まりです、着の身着のまま毎回更新していくます。

アリとキリギリス

今は昔

東の方向にある裕福な国にキリギリスが居ました

来る日も来る日も葉っぱの上で楽器を鳴らしていました
その音は聴いたものの心地を良くなれる程の音楽でした

葉っぱの下ではアリ達が冬に向けての蓄えをしていました

ある日の事

キリギリスの鳴らす楽器の音を女王アリが聴き
アリたちに言いました

『これは素晴らしい音色だ

このまま、冬が越せずに死なてしまつにましのびない
是非ともこのキリギリスを冬の間音楽家として迎えよ』

キリギリスは音楽家として女王アリに向いわれられて
冬を越すことができました

今は昔

西の方向にある貧しい国にキリギリスが居ました

来る日も来る日も兼つぱの上で楽器を鳴らしていました
その音は聴こえたもを幸せにさせる程の音楽でした

ある日の事

キリギリスの鳴らす楽器の音を女王アリが聴き
アリたちに言いました

『冬の蕭えもせずに
楽器を鳴らしてくるとは
確かに良き音色だが
冬を越すことはどうだ
お前達はせつせと冬を越す準備をするよ』

キリギリスは冬を越すことができずに死んでしまいました

今は昔

南の方に向にあるイライラの募る国にキリギ里斯が居ました

来る日も来る日も葉っぱの上で楽器を鳴らしていました
その音は聴いたものは極楽浄土に上の思いをさせる程の音楽でした

ある日の事

キリギ里斯の鳴らす楽器の音を女王アリが聴き
アリたちに言いました

『耳障りな音楽だ

兵隊をもって之を殺して來い』

キリギ里斯は抵抗しましたがアリの兵隊に殺されて死んでしまいました
アリたちもキリギ里斯の抵抗で被害をつけ
冬を越すことのできるほどの蓄えを得れず
皆死んでしまいました

桃太郎

「本日を持つてこの国の全都市を無防備平和宣言都市とします！」

テレビでこの国の馬鹿総理がそう言った。

『無防備平和宣言都市』、戦争が起きた時にこの都市は武装をしていないので無条件で降伏しますよ、と言って武力的な衝突を避け、被害を最小限に抑える事を目的としたものらしい。

『国を他国に受け渡すつもりかこの売国奴め！！』と言つ反対勢力の言葉を無視して国会で強引に可決に持つていった。

この宣言は戦争中で無いと宣言できないらしいから、軍隊を持たないことで他国に攻められたときについても宣言ができるようにするとの事。

軍隊を持つことを嫌つている自称人権団体達が歓喜の声を上げて万歳三唱をしている姿がテレビに映しだされている、カメラのその向こづくルメットを被つた怪しげな団体が余り目立たずに映つていた、僕の目はその怪しげな団体に釘付けになっていた、その団体は急に声を荒げ馬鹿総理の方へ走つて行つた、テレビの映像がズームアウ

トしていっている。カメラマンが現場から後ずさりながら撮影しているのだろう、馬鹿総理を警護していた警官隊と団体が衝突した直後にカメラの映像が途切れ、数十秒の砂嵐の後、上空からの映像に移り変わった、テレビのナレーターの話では極右の人たちによる暴動らしい、流石に見ていて気分の良い物では無かつたのでテレビの電源を消して横になつた。

馬鹿総理が無防備平和宣言都市を宣言してから一週間が経つた頃、早速宣戦布告もなしに海を隔てた場所にある隣国が攻めてきた、それも隣国の周りにある国と同盟を組んで。

この国が攻められたときには遠くの大國が助けに来てくれるはずだった、その為にその国の中も在つたはずなのだが、馬鹿首相が無防備平和宣言都市を宣言するために大国の基地を強制的に退去させたのだそうな、その国の大統領は呆れていしまつて、もう攻められても助けに行くものかと言つていたらしい。

特に資源のあるわけでもないこの国が攻め込まれても他の国の人たちは助け舟を出してくれないわけで、そもそも、特に資源の無いこの国が攻め込まれること自体が意味不明なわけで。

テレビをつけてもずっと砂嵐のまま、連合軍が何時この町に攻めてくるかもわからない、家のドアが蹴破つて銃を持った物騒な人たちがヅカヅカと家に入り込んできた。

唐突の出来事に体が一瞬硬直して、その場から動けなかつた、いつい男二人に捕まれて、もう一人の男が僕の額に銃口を向けた、ジンと額が熱くなつた、何がなんだかわからない、抵抗しようにも動く事ができない、体の中心から恐怖がこみ上げてきて、止めてくれと泣き叫ぶ事しかできなかつた。

「数十年前にわが国を占領し、大量虐殺をした島国の鬼の子孫共め遂に成敗する日が来た、鬼どもは一匹も残らずに殺しつくしてくれよう。」

銃口を向けてきた男の顔を見た、涙で少しかすれていようがその男が憤つているのがよくわかる、それは命令で町を占領しなければいけないことではなく、僕自身に向けられた、正確にはこの国に住む全ての人に行けられた怒りだろう。

『パンツ』

軽い音を聞いた、途端に額の熱の温度が急に上がり、上がつたかと思うと急激に減つていった、もう腕や足の感覚など無かつた、視界

が徐々に真っ暗になつてゆき、兵士たちの高笑いをする声も少しずつ遠くに聞こえるようになつていった、妹が兵士たちに連れて行かれる姿が目に入り、また、家の物を持っていく兵士の姿も見えた、それらが濃い暗闇も中に映像として流れているだけ、もはや感情の変化さえ無くなってしまった。

まあいいか後二・三秒もすれば僕の存在自体亡くなつてしまふのだから。

人間生産工場

町外れにある工場

其処では私たちに形の似たモノを生産している
それらは決められた時間に決められた役割を演じる為だけに存在している

あるモノは農業を、あるモノは工業を、あるモノはサービス業をする
一つ一つのモノ事態に名前があるらしいのだが、私達は総称して『
シャカイジン』と言っている。

時折、欠陥した『シャカイジン』が誤つて出回り、「私達は何の為
に存在しているのか！」とか高らかに叫びながらデモを行つたり
している

ただ、欠陥品は見つかり次第処分されているので日常生活において
そういう『シャカイジン』を見ることは滅多にない

『ナゼソソナコトヲシツテイル

遠くから消え入りそうな声がそう言つていた

そうだ何でこんな事を知つているんだ？

見たことも聞いたことも一度も無いはずなのに
いや・・・本当に無いのか？

何所かで見たことが？本当に？

思考がグルグルと渦を巻いて回つていく

記憶にある記憶と、記憶に無い記憶が混ざり合つて何とも言えない
色合いをかもし出している

『ワタシハホントウニワタシナノカ？』

先ほどの声が次はハツキリと聞こえた

私は私に決っている、ちゃんと今までの記憶だつてある
生まれてから今までの思い出を振り返り驚愕した

正確では無く継接ぎの記憶

今生産している『シャカカイジン』にインプットされているテンプレートのような思い出

不安が頭を過ぎる、ワタシは本当に私で在るのか
記憶は創られたものでは無いのか

『シカシワタシガナゼソンナコトヲカソガエテイル?』

先ほどとは別の声が大声で叫んだ
ズキリと頭痛がした、余りの痛さに私は手を止めて、その場にしゃがみ込んだ

周りの人たちが心配そうに声を掛けてくれたけれど、初めは意味がわからなかつた
何故しゃがみ込んだのかさえ

私は大丈夫だとだけいい、自分の作業へ戻つていつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8855e/>

ショートショートでこんにちは

2010年10月8日14時48分発行